

□追悼

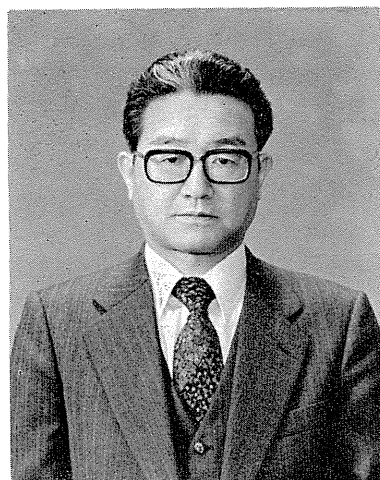
## 遠藤正臣教授の御逝去を悼む

鳥居方策\* 清水昭規\*\*

日本神経心理学会評議員で第5回会長を務められた故遠藤正臣教授は、昭和6年12月30日富山県富山市において生まれられた。旧制富山高等学校を経て、昭和30年3月金沢大学医学部を卒業され、その2年後に秋元波留夫教授主宰の同大学精神医学教室に大学院生として入られた。同36年3月島藺安雄教授の指導のもとに“Effects of specific and non-specific afferent impulses upon neuronal activity of the somatosensory cortex in cats”により学位を受けられ、同37年6月に助手になられた。同43年8月講師、同46年4月神経情報研究施設助教授、同48年10月助教授を経て、昭和53年4月に新設の富山医科薬科大学医学部精神神経医学教室の主任教授に就任された。

この間、昭和39年10月から1年間、文部省在外研究員兼イタリア国政府給費留学生としてParma 大学人類生理学研究所 Arduini 教授のもとに留学され、主として視覚系脳領域の単位活動に関する研究に没頭された。また昭和47年から48年にかけて1年あまり、西ドイツのAlexander von Humboldt 財団招聘研究員として、Ulm 大学神経科 Kornhuber 教授のもとに留学され、主として準備電位の研究に従事された。その後、昭和52年にも同財団の短期特別招聘研究員として西ドイツに滞在され、同国内の多くの大学の精神神経科教室を視察され、大いに見聞を広められた。

遠藤教授の研究領域は、神経生理学、臨床脳波学、臨床精神医学、臨床神経学、神経病理



故遠藤正臣教授

学、神経心理学など多岐にわたっているが、金沢大学時代、助教授に昇進された頃から神経心理学の研究に多くの時間を費しておられた。特に、タキストスコープによる大脳半球機能のlateralizationに関する研究は、富山に移られてからも精力的に続けられ、目ざましい研究の成果を次々に発表された。視覚刺激として有意義および無意味な仮名文字、漢字、アルファベット文字およびこれらの鏡像文字、さらにはHangul 文字、ランダム図形などを用いて研究された。なかでも、日本人と在日韓国人のHangul 文字認知機能についての研究は独創的であり、Hangul 文字を全く知らない日本人では左視野優位であるが、Hangul 文字の発音と意味を教えられた2週間後の再実験では視野優

\*金沢医科大学神経精神医学教室

\*\*富山医科薬科大学医学部精神神経医学教室

位性が消失した。そして Hangul 文字を読むことのできる在日韓国人では右視野優位が証明された。すなわち、Hangul 文字について全く知識がない場合は、これを図形としてとらえるため主として右半球で処理されるが、Hangul 文字の学習の程度により次第に文字としてとらえるようになり、その結果、主として左半球で処理されること、すなわち外国語習得のさいには、書字象徴の視覚情報処理に関して laterality の移行のあることを実験的に示された。さらに大脳半球機能優位性に及ぼす利き手の影響についても研究をすすめられ、左手利き、特に左手利き家族歴を有する左手利き者では大脳半球優位性の度合は弱くなり ambilaterality を示すことを報告された。

学会関係では、日本神経心理学会のほか、日本精神神経学会、日本神経学会、日本失語症学会、日本神経精神薬理学会などの評議員として活躍された。特に、日本神経心理学会では、昭和53年の神経心理学懇話会発足当初からの中心メンバーの1人であっただけでなく、第5回会長として学術集会を主催され、“Prof. Mingazzini (Roma) の失語症論への一寄与”と題する会長講演をなされた。この第5回懇話会のさいには、学会への改組を目前にした重要な会議と作業が行なわれたが、遠藤教授は会長としてこの大役を見事に果たされたのである。

遠藤正臣教授の趣味の一つは演劇であった。学生時代より演劇部に身を置き、いくつかの作品を上演された。しかし、彼は決して舞台の上で華々しく活躍する俳優にはならなかった。演出や舞台装置など、裏方の重要な役割を果たしながら、常に演劇部の中心的存在であった。大学院生として医局に入ってから彼は、毎日、夜更けまで机に向かっていた。分らないことがあると、それを徹底的に調べずにはいられない性分であった。したがって、彼は何を尋ねられてもほとんど即座に答えることができ、若い医局員の間では彼は「生き字引き」のような貴重な存在であった。尋ねられたことに答えられない場合には、何日もかかって一生懸命調べてくれたものである。

このような遠藤教授の知識探究欲は、受持ちの入院患者の診療においても発揮された。当時の若い医局員の中で、彼ほど時間をかけて患者を診察し、問題点を調査し、治療方針について熟慮するものはいなかった。ところが、秋元教授の総回診のさいには、入局一年目の不慣れさも手伝って、同教授の質問に要領よく答えることができず、若い医局員の中で彼が最もきつく油をしぼられるのであった。もっとも、秋元教授が遠藤先生の努力と実力を認識されるのに、それほど長い期間が必要であったわけではないが、……

遠藤教授は昭和53年4月の開講以来、着々と教室の研究、教育、および診療の体制を整備された。次第に人材も集まり、慎重に蓄えられたエネルギーがこれから旺盛な活動となって開花しようとしているとき、不幸にも急逝されたのである。昭和60年3月5日午後9時30分であった。遠藤教授の今後の飛躍的な活躍を信じて疑わなかった者たちにとって、それは惜しみてもあまりある不慮の死であった。お通夜の席でわれわれのお悔やみの言葉に対して、ハンカチで目頭を抑えながら、たったひと言「残念です」と言われた由子未亡人の声が、今も耳の奥から離れないでいる。それは遠藤正臣教授の真価を知り、心から敬愛し、その将来を期待した全ての人々に共通する感慨に外ならないからである。

#### 主な業績

- Endo, M.: Effects of specific and non-specific afferent impulses upon neuronal activity of the somatosensory cortex in cats. *Folia Psychiat. Neurol. Jpn.*, 16; 25—61, 1962.
- 遠藤正臣, 大家良作, 伊崎公德, 青木剣一郎: 遺伝性失調症 (Marie 型) の1剖検例. *精神神経誌*, 66; 1004—1016, 1964.
- 遠藤正臣: 肝レンズ核変性症 (Wilson 病) の1例とその家族. *脳神経*, 17; 617—623, 1965.
- Corazza, R., Endo, M., Tradardi, V. e Umiltà, C.: Studio comparativo dell'attività unitaria delle vie visive centrali nel gatto curarizzato e nel nembutilizzato. *Boll. Soc. It. Biol. Sper.*, 41; 1443—1446, 1965.

- Corazza, R., Endo, M., Tradardi, V. e Umiltà, C. :  
L'attività [tonica unitaria delle vie visive centrali nel preparato nembutilizzato—I)  
Comportamento della distribuzione della scarica durante stimolazione con luce continua. *Boll. Soc. It. Biol. Sper.*, 42; 249—251, 1966.
- 遠藤正臣, 伊崎公徳: 顕著な Pathologisches Weinen を示した脳軟化症の1剖検例. 十全医会誌, 80; 162—172, 1971.
- 遠藤正臣, 福田 孜, 小山善子: 肝レンズ核変性症 (Wilson 病) の脳波. 脳神経, 24; 981—989, 1972.
- 遠藤正臣, 中川美佐子: 古典紹介・翻訳と解説, W. Kleine : Periodische Schlafsucht. *精神医学*, 18(2); 191—207, 1976.
- 遠藤正臣, 村田忠良: 古典紹介・翻訳と解説, U. Cerletti : L'Elettroshock. *精神医学*, 19; 69—77, 171—187, 275—291, 1977.
- Endo, M., Shimizu, A. and Hori, T. : Functional asymmetry of visual fields for Japanese words in kana (syllable-based) writing and random shaperecognition in Japanese subjects. *Neuropsychologia*, 16(3); 291—297, 1978.
- 遠藤正臣: 古典紹介・翻訳と解説, J. Babinski : Contribution à l'étude des troubles mentaux dans l'hémiplégie organique cérébrale (anosognosie). *精神医学*, 20(8); 913—920, 1978.
- Endo, M., Nakamura, I., Shimizu, A., Torii, H., Kusano, M., & Enokido, F. : Considerations on the EEG in Bardet-Biedl's syndrome: 3 cases with a study of one patient's family. *Acta neurologica*, 35(4); 240—269, 1980.
- Endo, M., Hirano, M., Nakamura, I. & Kawai, Y. : The two survival cases of alphapattern coma caused by large amounts of hypnotica and neuroleptica. *Folia Psychiat. Neurol. Jpn.*, 34(4); 451—458, 1980.
- 遠藤正臣: 文字体系の情報処理と hemispheric lateralization—nonverbal な認知実験からの検討—, *神経内科*13(3); 201—205, 1980.
- 遠藤正臣, 中村一郎: 古典紹介・翻訳と解説 Liepmann, H. : Das Krankheitsbild der Apraxie („motorische Asymbolie“) anf Grund eines Falles von einseitiger Apraxie., *精神医学*, 22; 93—106, 327—342, 429—436, 1980.
- 遠藤正臣, 松原隆俊, 平野正治, 河合義治, 草野亮: 一般診療科入院患者の精神科コンサルテーション・ワーク——地方都市の総合病院での検討—, *臨床精神医学*10(2); 217—224, 1981.
- 遠藤正臣, 中村一郎, 清水昭規, 榎戸美佐子: Bardet-Biedl 症状群の脳波の遺伝学, *臨床脳波*, 23(5); 307—311, 1981.
- Endo, M., Shimizu, A. and Nakamura, I. : The influence of Hangul learning upon laterality differences in Hangul word recognition by native Japanese subjects. *Brain and Language*. 14(1); 114—119, 1981.
- Shimizu, A. and Endo, M. : Tachistoscopic recognition of Kana and Hangul words, handedness, and shift of laterality difference. *Neuropsychologia*, 19(5); 665—673, 1981.
- 遠藤正臣: Prof. Mingazzini (Roma) の失語症論への一寄与, 第5回神経心理学懇話会抄録集, 富山, 1981.
- Endo, M., Shimizu, A. and Nakamura, I. : Laterality differences in recognition of Japanese and Hangul words by monolinguals and bilinguals. *Cortex*, 17(3); 391—400, 1981.
- Shimizu, A. and Endo, M. : Laterality differences in recognition of Kana and Kanji words: A review. *Acta Neurol. New Series.*, 3(6); 705—720, 1981.
- Shimizu, A. and Endo, M., Yamaguchi, N., Torii, H. and Isaki, K. : Hand preference in schizophrenics and handedness conversion in their childhood; *Acta Psychiat. Scand.*, 72(3); 259—265, 1985.
- 遠藤正臣: 後頭葉症状群. *臨床精神医学*, 14(4); 493—497, 1985.